

『狭衣物語』 桜枝考

岡田, 貴憲
九州大学大学院人文科学研究院 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/7178817>

出版情報 : 文學研究. 121, pp.77-95, 2024-03-18. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン :
権利関係 :



『狭衣物語』 桜枝考

岡 田 貴 憲

一 はじめに

『狭衣物語』全篇を貫く第一の主題が、従妹である源氏宮への想いを自ら禁忌と定め、人知れず煩悶を繰り返す狭衣の片恋にあることは、巻一冒頭部の時点から周知の事実である。これに対し、巻四に至って繰り上げられる式部卿宮姫君との邂逅は、のちに狭衣をして彼女を「形代」とまで言わしめる点で他の女君の場合と一線を画し、件の主題を回収へ誘う重大事として位置づけることができる。

しかし、その発想源たる『源氏物語』宇治十帖における薫の浮舟との邂逅が、片恋の相手であった大君の死を契機にもたらされているのに対して、『狭衣物語』の場合は、源氏宮の斎院卜定がその役割を果たしていない点で隔りがある。その点において、狭衣を「形代」の入手へと向かわせる心理的契機、すなわち狭衣の片恋の転換点がどの段階に置かれているのが問われるが、この根本的な問題が従来論じられたことはない。

本稿ではこの問題への試解として、巻四の前半で描かれる、狭衣による斎院への桜枝持参の場面にこそ、源氏宮への片恋の転換点としての役割が看取できることを論じる。具体的には、巻一冒頭部との照応を見出だしたとき、

この場面における桜枝の重複という不審な文脈が、片恋の挫折の形象として現れ、それに続いて描かれる著名な斎院蹴鞠が、狭衣の挫折を哀傷する場として機能してくる、というのが本稿の見通しである。

二 重複する桜枝

当該の場面は、巻三終盤から続いてきた狭衣の出家企図をめぐる騒動が収束したところで、「まこと、院の女御は、五節の程に堀川の院に出でたまひにきかし」（巻四・㊦二〇三頁¹）に始まる院女御（嵯峨院女一宮）の里下がり、そして彼女の暮らす部屋の元の主であった源氏宮との交遊を導入部として、以下のように語り起こされる。

弥生の朔日ごろ、斎院の御前の桜いみじき盛りなるを、つれづれなる昼つかた、御髪上の間にゐざり出でさせたまひて見出させたまへるに、空の色浅緑にてうらうらとのどかなるに、野辺の霞は御垣の内まで包むれど、なほこぼれたるにほひ、ところせげなるに、この対の御前なる桜のほひえならぬかたはらに、榊の青やかにてもてはやしたるなど、ほかの木立には似ずさま変りて、をかしく御覽ぜらるるにつけても、明け暮れ御覽じ馴れし古里の八重桜、「いかならむ」とおぼしめしやりて、「一重をだに今は見るまじきぞかし」と、花のうへにはなほ口惜しき御心のうちなり。

一重づつにはひおこせよ八重桜こち吹く風の便り過ぐさず
などおぼしめすも、待遠なれば、女御殿に聞こえさせたまふ。

時知らぬ榊の枝にをりかへてよそにも花を思ひやるかな

榊の枝に付けさせたまへり。

（同二〇五頁）
斎院の榊葉に引き立てられた満開の桜花から、今は戻ることのできない堀川邸の八重桜をゆかしく思い起こした

源氏宮は、柿の枝を添えて、懷旧の情をそのまま院女御へ詠み送った。やがて堀川邸を訪れた狭衣は、その飽かず美しい消息に目を通すと、「よそにも花を思ひやる」との訴えに応えるべく、庭の八重桜を手折らせて齋院へと向かう。大將殿はすぐれたる枝折らせて、齋院にもて参りたまへり。御前には琴の御琴弾き澄まいておはします。御几帳より琴の端ばかりさし出でて、桜萌黄の三重の御衣どもに、紅の擣ちたる、樺桜の二重織物の小桂など、重なりたる御袖ばかりぞ見ゆる。「女御殿の御前にゆかしげに聞こえさせたまへりつれば」とて参らせたまふを、「見苦しかりける言を見たまひけるにや」と、なかなか知らぬ人よりも恥づかしくおぼしめすに、御顔いと赤くなりて、御扇をさしやりて花を入れたまふとて少し傾かせたまへるに、はらはらとこぼれかかれる御額髪のかかり、御面つきなど、「久しく見たてまつらざりつるけにや、様ことなる御にほひにこそならせたまひにけれ」と、とみに花もうち置かれず、つくづくとまもられて涙のこぼれぬべきを、「人々のあやしくや見む」と思ふに、しひてわびしければ、ありつる女御殿の御返りの硯の上にうち置かれたるを、取りて見たまへど、いとどかく気近きほどの心のうちは、なほ、さらに紛れがたし。

(同二〇九―二一〇頁)

源氏宮の差し出した扇に桜枝を載せようとした際、時を重ねてますます優れるその美貌に目を奪われた狭衣は、心惑いを誤魔化そうと、思わず硯の上に置かれていた消息に手を伸ばす。それは源氏宮の消息に対する院女御からの返事であり、ここには描かれていないものの、先の場面に続く次の記述から、返事には桜枝が添えられていたことがわかる。

おぼしやるもしるく、殿の桜は「峰つづきもかうや」と見えて、散るも盛りなるもさまざまめでたきを、女御はなやましき御心地の紛らはしにもながめ出でさせたまひけるほどに、この変らぬ色はめづらしうおぼされて、過ぎにしかたいと恋しくおぼし出でさせたまひけり。

柿葉になほをりかへよ桜花またそのかみの我が身と思はむ

なべてならぬ枝にさしかへてぞ奉らせたまひける。

(同二〇五—二〇六頁)

狭衣がこの桜枝を目にしたか否かは不明だが、少なくとも「なほをりかえよ」の返歌によって、彼は院女御からすでに桜枝の届いていたことを知る。院女御の返事に目を通した狭衣は、そのついでに齋宮(女三宮)、入道宮(女二宮)の話題へと及び、出家を断念した自らの苦衷を訴えるが、源氏宮は取り合わない。やむなく彼が女房との戯れに気を紛らわしているうちに、若公達らが登場し、物語は先に述べたように齋院蹴鞠へと展開してゆく。

この桜枝をめぐる一連の場面で注目したいのは、院女御によって送られていた桜枝と、狭衣が持参するそれとの重複である。狭衣が無用と知らずに桜枝を持参したのは、持参場面の直前、堀川邸において次のような不可解な問答があつたことに起因する。

「この花奉らせたまひつらむや。いかやうにか」と、ゆかしげに聞こえさせたまへど、「変らぬ色のあはれのみ心にかかりて。花の色はいかが聞こえさせはべらむ」と、しどけなげに言ひ紛らはしたまへる御氣配のをかしさを、昔の御名残変らぬ御心にて、なまゆかしき方様に、うちまじりたる御仲にぞありける。(同二〇九頁)

源氏宮の要望に応えて桜枝を届けたか尋ねる狭衣に対し、なぜか院女御は嘘ともとれる答えを与え、狭衣を齋院へと向かわせる。この文脈の不審さについて、従来の研究は特段の注意を払ってこなかったと思しく、唯一管見に及ぶのは、『狭衣物語全註釈』による「ただし、源氏の宮が見たがっていた八重桜は(中略)既に女一の宮が贈っている。狭衣は源氏の宮に会いたいがために、桜を持参したのである」との言及のみである。

しかし仮に、狭衣が源氏宮に会いたいがための口実として桜枝を持参したのであるならば、院女御がここで事実を告げていようと、彼にはそれを都合良く無視することができたはずであり、院女御があえて嘘を告げる理由はない。またそれ以前に、そもそも院女御の返事がまだ送られていなければ、狭衣の桜枝持参が徒労に終わることもなかった。彼女のしたためた文を、狭衣が自ら手折らせた桜枝とともに持参するという流れであっても不都合のな

い場面である。

そうでありながら、院女御が先に返事を送り、狭衣の問いをはぐらかし、結果として狭衣が無用と知らず重複する桜枝を持参する、という文脈が選ばれた背景には、しかるべき理由があったと推測される。私見によれば、それは当該場面との照応が見出だされる巻一冒頭部において導かれる、狭衣の人物設定と大いに関わり合っている。

三 好尚への無理解

狭衣が源氏宮を訪れる際に枝花を持参するのは、『狭衣物語』全体を通して当該場面と次掲の巻一冒頭部との二場面だけに限られる。かつ両場面には文章表現上の対応も見出だすことができ、巻四の桜枝持参場面は、明らかに巻一冒頭部との照応を意図して構えられていることが知られる。

少年の春は惜しめどもとどまらぬものなりければ、三月の二十日あまりにもなりぬ。御前の木立何となく青みわたりて木暗きなかに、中島の藤は、松にとのみ思はず咲きかりて、山ほととぎす待ち顔なるに、池の水際の八重山吹は、井手のわたりにことならず見渡さるる夕映えのをかしさを、ひとり見たまふも飽かねば、侍童のをかしげなるして、一枝折らせたまひて、源氏の宮の御方に持て参りたまへれば、御前には、中納言・中将などやうの人々候はせたまひて、宮は御手習ひ・絵などかきすさびて添ひ臥させたまへるに、「この花の夕映えこそ、常よりもをかしく侍れ。春宮の、『盛りにはかならず見せよ』とのたまはするものを」とて、うち置きたまふを、宮、すこし起きあがりて、見おこせたまへる御まみ・つらつきなどのうつくしき、花のにほひ・藤のしなひにもこよなくまさりて見えたまふを、例の、胸ふたがりまさりて、つくづくとまばられたまふに、「花こそ春の」ととりわきたまひて、山吹を手まさぐりしたまへる御手つきの、いとどもてはやされて、世に知らず

うつくしげなるを、人目も知らず我が身に引き添へまほしくおぼさるるぞ、いみじきや。「くちなしにしも咲き
そめけむ契りこそ、口惜しけれ。心のうち、いかに苦しがるらむ」とのたまへば、中納言の君、「さるは、こと
のはは多く侍るものを」と言ふ。

いかにせむ言はぬ色なる花なれば心のうちを知る人ぞなき

と思ひ続けられたまへど、げに人も知らざりけり。

(卷一・①九—一〇頁)

童に手折らせた枝花を狭衣が持参し、源氏宮とその御前の様子を見回し、持参理由を述べ、源氏宮の美貌に目を奪われる、というこの場面の叙述順序は、桜枝持参場面におけるそれとまったく重なっており、やがて狭衣が女房に戯れる点まで含めて両者は照応関係にある。卷四の桜枝持参場面は、この卷一冒頭部の再現部として描かれてい
るとみられ、ここで提示された事実こそが、桜枝の重複という不審な文脈を読み解く上での鍵となる。

その中で、狭衣が童に手折らせて持参した八重山吹の一枝を、源氏宮が受け取る際に咄く、傍線部の一節に着目
したい。咄かれた一節は底本では「花こそ花の」とある所だが、諸本の半数は「花こそ春の」に作る。^⑤「花こそ花
の」の参考歌として引かれる、

にほふよりはるはくれゆくやまぶきのはなこそはなのなにつられ

(『続古今和歌集』卷第二・春歌下・一六七番)^⑥

は藤原定家の詠であって成立時期が下ののに対し、「花こそ春の」については、『祢子内親王桜柳歌合』における美
作なる女房の詠、

あし引の山のはよりは出でねども花こそ春の光なりけれ

(『祢子内親王桜柳歌合』二番)

が本歌として想定できる由、森下純昭『狭衣物語』冒頭部「花こそ春の」引歌考^⑦に指摘がある。歌合を主催した
祢子内親王は、この物語の作者と目される六条斎院宣旨が仕えた人物であることから、ここは「花こそ春の」の

本文に従うのが穩当とみる。⁽⁸⁾

『祿子内親王桜柳歌合』は前半四首が桜、後半四首が柳を題とする歌合で、前半に詠まれた右歌の「花」は桜を指す。つまりは、源氏宮の吹いた一節が「花こそ春の」であるとき、それは他ならぬ桜花への賞美となり、その引歌表現は、少なくともこの物語の初期享受層である祿子内親王周辺の女房にとつては、理解できることを前提としていたと考えられる。⁽⁹⁾そしてこの表現は、右記森下論が「巻四で齋院となつた源氏宮がふるさと堀河院の桜に思いを馳せていることとみごとに符節が合う」と言及するように源氏宮の懷旧と結びつき、また源氏宮への返事を院女御が送つた後、彼女の元を訪ねた堀川閨白が語る次の言葉とも符合してくる。特に「幼くより我がことと取りわけたまひて」との詞章が、「花こそ春の」ととりわきたまひて」と一致することは、引歌認定の上で留意されてよい。

大殿、内裏より出でたまふまに、まづこなたに参りたまひて、近き御几帳のもとにて上の御消息など聞こえさせたまふに、ありつる櫛の御前なるを見たまひて、「そのかみの心地しはべる枝ざしは、おほしめし出づることとゆかりけるにや」と聞こえさせたまへば、「齋院より賜はせたりつる」とのたまへば、「さていかやうにか」とゆかしがりきこえたまへば、ありつる文をさし出させたまへるを、取りて見たまふまに、「あなをかしげの御手や」と、うち笑みつつ、うち返しうち返し見たまへる気色、おぼろけならむは恥づかしげなるを、めでたしとおぼしたるさまぞなのめならぬ。「げに思ひかけざりし御住居どもなりかし。あまたの中に高き八重のをば、幼くより我がことと取りわけさせたまひて、静心なげにおほし扱ふめりしを、いかにゆかしくおほし出づらむ（下略）」

（巻四・㊦二〇六―二〇七頁）

森下論の言及は、源氏宮が幼くより堀川邸の八重桜を我がものと好み、特別に扱っていたとする堀川閨白の言に触れ、『源氏物語』からの強い影響も考慮すれば、理想的女性像としての源氏宮が首尾『桜の花』で統一的に人物造形されていることはむしろ理解しやすい」ことを述べるまでに留まる。しかし押さえておくべきはその先で、こ

の「花こそ春の」という桜花への賞美を聞いた直後の、狭衣の反応にこそ目を向けたい。

ここで狭衣は、山吹枝を弄ぶ源氏宮の手つきに惹かれつつ、秘めた恋を「口無し」にかけて懊悩するばかりで、山吹よりも桜に心を寄せる彼女の、眩きの真意にはまったく気づいていない。もしもその真意に気づいたならば、狭衣は失態を認めて源氏宮の希望に沿うべく挽回を図ったはずだが、そうした描写は一切見られない。おそらく狭衣は、読者にとつては自明のはずの「花こそ春の」の含意を知らず、「花」を山吹と理解したがために、源氏宮の本意を知って不明を恥じるべき所にも拘わらず、彼女の手にする一枝にひたすら己をよそえる愚を犯した、と考えられる。より踏み込んで言えば、『裸子内親王桜柳歌合』中の一首に本歌を求める「花こそ春の」という表現自体が、読者には伝わるが狭衣には伝わらない暗号を仕掛けるべく、選り取られた引歌だった可能性も想定される。

狭衣が源氏宮の好尚に対して無理解であったとするこの見地は、二人が同じ堀川邸の内に「二葉より露ばかりへだつることなく」(巻一・①二頁)育った間柄にあることを思えば不自然とも思われ、ここで「花こそ春の」の真意を読み解けなくとも、狭衣がそれ以前から源氏宮の好尚を知っていたと仮定することは可能とも思える。だがそうした正当とも思われる仮定は、巻一冒頭部の描写の典拠とされる、次掲の『源氏物語』胡蝶巻の起筆部との比較によって斥けられる。

三月の二十日あまりのころほひ、春の御前のありさま、常よりことに尽くしてにほふ花の色、鳥の声、他の里には、まだ古りぬにやとめづらしう見え聞こゆ。(中略)色を増したる柳枝を垂れたる、花もえもいはぬ匂ひを散らしたり。他所には盛り過ぎたる桜も、今盛りにほほ笑み、廊を繞れる藤の色もこまやかにひらけゆきにけり。まして池の水に影をうつしたる山吹、岸よりこぼれていみじき盛りなり。

〔源氏物語〕胡蝶・③二六五、一六七頁¹⁰⁾

この六条院の光景は、藤と山吹の見頃である晩春において、桜もまた一般には盛りを過ぎながらもなお見頃だっ

た事実を示し、後の幻巻における、

春深くなりゆくまに（中略）山吹などの心地よげに咲き乱れたるも、うちつけに露けくのみ見なされたまふ。

外の花は、一重散りて、八重咲く花桜盛り過ぎて、樺桜は開け、藤はおくれて色づきなとこそはすめるを（下略）

（同幻・④五二九頁）

との記述からも、「三月の二十日あまり」は藤と山吹と桜が咲き競う時節だったことが確認される。そしてこの胡蝶巻の光景を巻一冒頭部と比べたとき、後者からは桜に関する描写があからさまに欠落していることを指摘できる。堀川邸の御前にあつて狭衣は藤と山吹のみに意を払い、源氏宮の居室を訪れた際も、「峰つづきもかうや」と並んでいるはずの桜に彼が目留めることはない。源氏宮の幼少から好む桜だけが狭衣の視界から排除されているこの状況は、狭衣が源氏宮の好尚を知っていたと仮定するならば不合理と言わざるを得ず、むしろ桜に対する源氏宮の心寄せを、狭衣が把握していなかったからこそその光景と理解される。

さらに、巻一冒頭部から巻四の桜枝持参場面に至るまでの間、桜が二人の話頭に一度も上らないことは、本稿の見地を支える決定的な事実である。一時は新帝への入内が取り沙汰されながら、神託によつて齋院へ卜定されるという流転の中で、源氏宮の元には幾度も狭衣が訪れているが、「三月になりぬれば、下りにし大式の家に、齋院の渡らせたまふべきことなど、今ひきかへて急がせたまふ」（巻一・①二三二～二三三頁）と記される好季にあつても、彼はわずかなりとも桜に言及しようとしない。すでに狭衣が自らの熱情を一方的に進らせ、兄同然と慕われていた源氏宮から疎まれていたことを考慮したとしても、彼が源氏宮の好尚を幼少より押さえていたと考えるには、右の空白はあまりに不自然に過ぎる。

こうした状況証拠から導かれるのは、源氏宮の植物への愛好については承知しながらも、彼女の格別の好尚が桜にあることに關しては無理解であつた、という狭衣の人物設定である。そして、巻一冒頭部の再現部として描かれ

た巻四の桜枝持参場面は、まさに右の人物設定を照応する状況下に利用するべく用意されたものと考えられることばかり、それによって初めて、桜枝の重複という不審な文脈に有機的な解釈が与えられる。

四 挫折と哀傷

狭衣が堀川邸を訪れたのは、まさに院女御を来訪した堀川関白が、斎院となった源氏宮の消息を眺めつつ、彼女の妙な命運を回顧していた時のことである。次掲の本文にこそ語られないものの、堀川関白が見せる源氏宮の消息を見つめる狭衣にとって、それは、「よそにも花を思ひやる」という源氏宮の歌から、彼女の桜に対する格別の好尚を知る、初めての機会だったと考えられる。

大將殿参りたまへれば、この文見せたてまつりたまひて、「ただ今この御手ばかり書く人は誰かある。式部卿の宮の上こそ名高くものせらるれど、文字様のこまかにをかしげなるさまなどは、なほすぐれてこそ見ゆるは、思ひなしにや。いかが」とささめきたまふに、まいて、何事も類なきものに思ひしめきこえたまへる御目には、めづらしく様ことにのみおぼえたまへば、うちも置かれずまもりたまへり。「今も昔もかばかりなるは難くや候ふらむ」とばかり申させたまへど、我がものと見ずなりぬる口惜しさはまづ胸騒げば、参らせたまひつ。

(巻四・⑪二〇八～二〇九頁)

ここから狭衣が、源氏宮への返事をめぐる院女御との問答を経て、手折らせた桜枝を持つて斎院へ向かい、すでに院女御から桜枝が届けられていたことを知るに至る流れは、すでに述べたように一見すると不審な文脈に映る。しかし、源氏宮の好尚に対する無理解という、巻一冒頭部からの見地に基づいて捉え直すことで、その文脈は、源氏宮への狭衣の片恋の挫折を形象すべく、むしろ必然的に組まれたものとして読み解くことができる。すなわち、

卷一冒頭部から実に六年もの間、源氏宮の格別の好尚に気づくこともなかった狭衣の、この期に及んでの行動がすでに無意味であることを暗示するのが、桜枝の重複という文脈なのではないか、というのが本稿の試解である。

狭衣の長きにわたる無理解を露わにし、源氏宮への片恋がすでに手遅れであることを知らしめるためには、狭衣の持参した桜枝が、それに心を寄せる源氏宮の眼前で無用と化す必要がある。狭衣が院女御による送付を知りながら桜枝を持参するのではなく、あるいは彼女に代わって消息と桜枝を持参するのでもなく、あくまで送付を知らずに桜枝を持参する、という文脈があえて選ばれた理由はここに求められ、院女御の堀川邸への退出を導入部とする一連の場面展開は、そうした結末に至るべく周到に用意されていることが明らかになる。

源氏宮から堀川邸の院女御に送られる消息は、狭衣に源氏宮の格別の好尚を気づかせ、彼を齋院へおびき寄せるための仕掛けとしてある。消息を受け取った院女御は、狭衣の来訪に先んじて桜枝を送付することで後の狭衣の行動を無効化し、続く堀川関白の訪問は、狭衣の未だ知らない源氏宮の幼少からの八重桜への心寄せを、「幼くより我がことと取りわかせたまひて」という卷一冒頭部と一致する詞章によって再確認する役目を担う。こうした道具立ての中に登場する狭衣は、源氏宮の消息によって彼女の好尚に気づき、おそらくはかつての山吹枝持参を失態として密かに想起することで、自ら桜枝を持参する必要に迫られる。最後に仕上げとして、送付の有無を尋ねられた院女御が嘘ともとれる答えを与えることで、狭衣は無用の桜枝とともに齋院へ送り出され、そこで重複する桜枝を目の当たりにし、源氏宮の好みも理解せぬまま荏苒とした自身の恋が手遅れであることを突きつけられる。

このように、すべての展開は桜枝の重複という状況を招くための不可欠要素として機能しており、卷一冒頭部から語られてきた狭衣の片恋は、その再現部たるこの桜枝持参場面において挫折を迎えているという仮説がここに成り立つ。そして、以下に続く場面をこの仮説に則って読み解いた時に見えてくるものが、片恋の挫折を哀傷する場としての機能に他ならない。

東の隅に花見るとて人々あまた居たる所に寄り居たまひて、「君達さへあまりにつつしみたまひて、今は目も見入れたまはねば、いみじうつれづれにこそなりにたれ」とのたまへば、新少将とておとなしき人、『ものにもがなや』とこそみな思ひたる気色どもに侍れば、まして何かは見入れまゐらす人も侍らむ」と聞こゆれば、「心憂のこゝや。もの恐ろしからで過ぐしし末の中ごろ、悔しうこそ思ひ出でらるれ」など、いづれとなく言ひたはぶれたまひて、

御垣守る野辺の霞もひまなくて折らで過ぎゆく花桜かな

わざとなく言ひすさみたまへば、少将、

「花桜野辺の霞のひまひまに折らでは人の過ぐるものかは

さまでは、なでふ諫めか侍らむ」と聞こゆれば、うち笑ひたまひて、「ひとりしもおぼしとがむるこそいとほしけれ。さらばいかがすべき。かの東の対に昔もさることありけるは」とのたまへば、「逢ふにしかへば、ましてかばかりの身は何か惜しう侍らむ。この世の面目にこそは」など、わららかにたはぶれきこゆるを、若き人々はあへなく汗あえてぞ聞きける。
(同二二―二四頁)

院女御の消息に関する話題から及んだ苦衷の訴えを、源氏宮に黙殺された狭衣は、やむなく女房の集う一角へと離れて、戯れに気を紛らわし始める。その中で新少将なる女房と交わす傍線部の贈答歌は、『源氏物語』夕顔巻で六条御息所を訪れた光源氏が、早朝の帰り際に女房の中将君と交わす、

「咲く花にうつるてふ名はつつめども折らで過ぎうきけさの朝顔

いかがすべき」とて、手をとらへたまへれば、いと馴れて、とく、

朝霧の晴れ間も待たぬけしきにて花に心をとめぬとぞみる

と公事にぞ聞こえなす。

〔源氏物語〕夕顔・①一四七―一四八頁

との贈答歌をあからさまに意識したものとみられ、中将君に色目を使った光源氏詠と同様に、狭衣詠の「折らで過ぎゆく花桜かな」は、従来一般には「折りたい桜の花（女房たちを譬える）も折り取れず、むなしく通り過ぎて行くことです」（『新潮日本古典集成』）のように解されている。^①しかし、狭衣がこの直前に源氏宮の好尚を知り、程もなく片恋の挫折を迎えたという見地からは、むしろ「そのように神慮を憚って、源氏宮は勿論あなた方とも契りを結ぶ事なく過ぎてしまうことだよ」（『日本古典文学大系』^②）という含意を「花桜」に強く読み取ることができるのであり、この一首は表向きは女房への戯れでありながら、その心裏には源氏宮を我が手にできないことの嘆きが、狭衣自身だけが分かるように隠されていたと考えられる。そうした狭衣の哀傷は、続けて描かれる著名な齋院蹴鞠の場面で頂点に達する。

「花のために情けおくれたることなれど、何となく心行きて、見どころあることなり」などのたまひて、「いづらいづら」とのたまへば、色々の姿ども脱ぎこぼして、足もとしたためつつあまたうち連れて歩み出でたり。（中略）大將殿なども興じたまひて、「ややもすれば下り立ちぬべき心地こそすれ。などていましばし若くてあらざりけむ」とのたまへば、御簾の内なる人々、「まめ人の大將はおはせずや侍りける」「さらばしも、花の散るも惜しからじかし」など、口々いと立てたてまつらまほしげなる気配どもなり。「そのいたう屈じたる名ざしこそよそへつべかなれ。こよなく見くらべたまはむがねたければ」とてうち笑みたまへる愛敬は、花のにほひよりもこよなうまさりたまへり。花のいたう散りかかるを見たまひて、「かうりたまかへつてあとなかばふかし」と忍びやかに口ずさびたまひて、高欄に押しかかりたまへるまみ・気色・御声などは、かの「桜は避きて」とて花の下にやすらひたまへりし御様を、その折はをかしと見しかど、この御有様、類なげにぞ何事の折にも見ゆる。

（巻四・①二二四―二二六頁）

源氏宮に無言であしらわれ、女房と戯れるしかなかった狭衣の眼前では、若公達による蹴鞠が始められるが、狭

衣はそれに参加することなく、鞠に散らされる桜花を眺めて高欄に留まる。この斎院蹴鞠の原拠である『源氏物語』若菜上巻の六条院蹴鞠では、女房の言にある「まめ人の大将」夕霧も、語り手のいう「桜は避きて」の言を残した柏木も、ともに蹴鞠に加わっていたが、狭衣は「桜のためには思いやりのないこと」として自ら鞠を蹴り上げ桜花を散らすことは拒絶する。

なぜ狭衣は、他にも様々に言い訳を構えて庭に降り立たないのか、その心情について従来の研究には言及がみられない。しかし、表向きの方便の背後に、さきに知ったばかりの源氏宮の好尚が働いていると考えることで、彼の拒絶には初めて明確な理由が与えられる。源氏宮の格別の心寄せが桜花にあることを知った今、桜花を散らす蹴鞠に参加することなど、狭衣には許容できないことが容易く理解される。

他方、蹴鞠を傍観する狭衣は、散りゆく花に「かうりたまかへつてあとなかばふかし」と口ずさむ。底本では「あとなかば」を「あととなるは」に作る所だが、ここは『本朝麗藻』上巻所収の大江以言の詩「暮春於^三右尚書管中丞亭^一同賦^二閑庭花自落^一」の一節、「行履珠帰跡半深¹³」であることが、大谷雅夫「道をうづむ花¹⁴」によって指摘されている。同論は、「行楽の喧噪の去ったあと、花は自ずからに散り続けて、人々の足跡を静かに消してゆく」ことを意味するこの一節から、口ずさんだ狭衣の心境について「行楽の客が立ち去った後の閑庭に花の心を識る孤高を、狭衣は、公達たちに立ち交じることのできぬ己の孤独に重ねて味わっていたであろう」と述べるが、ここではむしろ、同論が「花が道を覆うという趣向は、和歌にはしばしば見られるものであった」として掲げる、

ちる花は道見えぬまでうづまなんわかる人もたちやとまると

（『拾遺和歌集』巻第六・別・三〇三番）

という和歌表現が、狭衣の片恋の挫折という見地に依ったときに強く立ち上がってくることに注目したい。別れゆく人を留めるべく、道を埋め隠すまで花が散ることを願う同歌の趣向は、

しひて行く人をとどめむ桜花いづれを道と迷ふまでちれ

（『古今和歌集』巻第八・離別歌・四〇三番）

を踏まえた類型表現として捉えられるが、狭衣の眩く「跡半深」との詞章からはそうした表現が連想されるはずであり、そのイメージは蹴鞠を傍観する狭衣の複雑な胸中に重なり合う。

源氏宮の好む桜花を自ら散らすことは避けながらも、狭衣は彼女との離別に抗いたいがゆえに、若公達の蹴鞠を遮らず、落花が道を埋めてゆくことを願う。そのような背反の情をもたらし狭衣の眩きは、片恋の挫折を経たからこそ選ばれた一節であったと考えられる。こうして斎院蹴鞠における狭衣の行動は、一貫して片恋の挫折を哀傷するものとして機能してくるのであって、そう読み取つてこそ、斎院蹴鞠という場がここに描かれていることの意味を理解することが可能になると考えられる。

狭衣による「形代」入手の動きが始まるのは、実にこの場面の直後からである。蹴鞠が終わり夕の宴も果てた夜、狭衣は致仕大納言女の元を訪れるべく斎院を退出するが、その途上で故式部卿宮邸を発見し、垣間見た未亡人の、源氏宮を思わせる容貌に驚嘆する。物語はここから、後に彼が「ただ、あながちなる心のうちをあはれと見たまひて、かかる形代を神の作り出でたまへるにや」(巻四・㊦二五五頁)とまで評する無二の女性・式部卿宮姫君との出会いへと強引に舵を切つてゆくが、巻三後半で初めて紹介された際は「げにすこしいはけなきほどにや」(巻三・㊦一五四頁)との評価に終わつた姫君が、ここで唐突に存在感を増し、後には狭衣の子を宿すまでに至ることの意味は過小評価すべきでない。

鈴木泰恵「恋の物語の終焉」¹⁶⁾は、「形代」と認識されて後の姫君に「源氏宮思慕の物語とともに、狭衣の恋の物語を終焉に導いてい」く役目を見出すが、その姫君との邂逅が、狭衣による無用の桜枝持参から、桜花を散らす斎院蹴鞠を経たこの時点に置かれていることは、充分に注意される必要がある。巻三の段階では端役に過ぎなかった式部卿宮姫君が、他の女君には与えられなかった「形代」としての地位を獲得できたのは、彼の片恋がすでに挫折を迎えていたからだということが、本稿の見地からは了解される。

以上のように、斎院蹴鞠の前後の場面を、挫折の哀傷から「形代」の入手に向かう滑らかな展開として読解できることは、それを支える仮説、すなわち桜枝の重複に片恋挫折の形象を読み取る見方の、正当性を保証するものと考えられる。これをもって、卷一冒頭部から続いてきた狭衣の源氏宮への片恋は、卷四の桜枝持参場面において転換点を迎えている、との結論が得られるのである。

五 総括と展望

卷一冒頭部の、桜が藤・山吹と共に咲く「三月の二十日あまり」の時節に示された、源氏宮の好尚に無理解な狭衣の片恋は、そこから六年もの時を隔てた巻四で、源氏宮からの「よそにも花を思ひやる」の訴えをきっかけに初めて起こされた、あまりに遅すぎる挽回の行動をもって転換点を迎える。狭衣が持参する、院女御の送付と重複する桜枝は、彼の片恋の挫折の形象としてあり、自らの恋がすでに手遅れである事実を突きつけられた狭衣は、蹴鞠によって散らされ道を埋める桜花に片恋の挫折を哀傷し、「形代」の入手へと恋の焦点を切り替えてゆく。『狭衣物語』巻四における桜枝の重複という不審な文脈を読み解くことで見えてくるのは、このような緻密な構想であって、それは卷一冒頭部の人物設定を、照応する再現部のなかで利用することによって果たされているのである。

その後、式部卿宮姫君との邂逅は、「まことしうむつまじき有様になりて、このままの心地せば、思ひ離るるかひなう、捨てがたうもあるべき世かな」(巻四・下二六〇頁)と出家の本意を翻させるほどの衝動を狭衣に与え、源氏宮への片恋という主題は一応の回収へと向かい始める。ただしその路線は、姫君を邸に迎えた次の新年に、『かばかりを慰みにてやみね』と、神仏のおきてたまへりけるにこそは」(同二九七頁)と早くも揺らぎ始め、やがて斎院を訪れた際に「いとかばかりなるにほひは、さらに並びきこえさすべき人こそなかりけれ」(同三〇四頁)と修正さ

れてしまうが、「暑さほどになりては」(同三〇三頁)と提示されるその訪問の時期が、かの「暑さのわりなきほどは」(巻一・④四三頁)とあつた夏の日の告白と重なり合うことは極めて暗示的である。

前掲森下論においては、「冒頭場面の直後で、男主人公が源氏宮に『準へなる人』を求める思いに巻四での式部卿宮の姫君が形代として照応」しているとの見解も示されているが、本稿の指摘は、巻一と巻四の間にあるそうした照応関係の、ごく一端を開いたに過ぎない可能性がある。春から夏にかけて移ろう狭衣の心情もまた、巻一における片恋の変遷を利用したものと考えられるのか、あるいは、狭衣と源氏宮を桜枝によって結びつける院女御の存在や、狭衣が院女御と関わる契機となつた女二宮への密通も含めて、それらが物語執筆時からの構想下にあつた可能性についても、本稿の試解から導かれる発展的課題として追考を期したい。

注

(1) 『狭衣物語』の引用は鈴木一雄校注『新潮日本古典集成 狭衣物語 上下』(新潮社、一九八五―一九八六年)により、私に句読点・鉤括弧を整理する。

(2) 傍線部はじめの狭衣の問いは、小町谷照彦・後藤祥子校注・訳『新編日本古典文学全集 狭衣物語 ①②』(小学館、一九九一・二〇〇一年)では「この花たてまつらせたまへらんに、いかやうにてか」(巻四・②二三〇頁)とある(底本は第一系統の平出本)。この本文に従うと、狭衣は院女御による桜枝送付をすでに知っていたとも理解できそうだが、狭衣が院女御の行動を知る機会がなかったため不審である。ここは、狭衣の問いかけを単なる思い込み(源氏宮の消息に基づく先入観)によるものとみて、のちに返事をはぐらかす院女御の態度から、送付がまだであつたと考え直したと理解するのが正しく、その場合、斎院へ桜枝を持参する狭衣の行動原理は、集成本の場合と何ら変わらないことになる。

(3) 狭衣物語研究会編『狭衣物語全註釈Ⅷ 巻四(上)』(おうふう、二〇一四年)。

(4) 新全集本(底本は第一系統の深川本)の異文「一房づつ折らせたまひて(中略)『この花^{どもの}の夕映は、常よりもをかしう侍るものかな。(下略)』」(巻一・①一七頁)では、狭衣は藤と山吹の二枝を持参し、源氏宮はそこから山吹を選び取つた形になる。中田剛直『校本狭衣物語』(桜楓社、一九七六―一九八八年)によれば、「一房づつ」は深川本の独自異

文だが、ほかに全伝本の半数弱に当たる十四本が傍線部を「一ゑたつ、」に作る。ただし、波線部を「花どもの」に作る伝本は深川本のほかにわずかに四本に限られ、その他はすべて「花の」に作るため、傍線部も原型は「一枝」で、それが後に「一枝つつ」へ改変されたかと疑われる。私見によれば、この改変は『狭衣物語』享受層の拡大に伴い「花こそ春の」の原拠が理解されなくなったことに起因するとみられ、それが後掲の定家歌や師時歌を本歌とする山吹の引歌表現として捉え直されたことにより、二枝から山吹を選び取る文脈が作られたと考えられる。

- (5) 中田『校本狭衣物語』によれば、本行本文を「花こそ春の」に作る伝本は十五本、対して「花こそ花の」に作る伝本は十六本である。相互に誤写の可能性が考えられることから、本文面ではいずれが優位とも言いがたいが、本稿では注(4)に述べた私見の立場から、「花こそ花の」の本文を後発とみる。

- (6) 和歌の引用は断りのない場合『新編国歌大観』(角川学芸出版)による。

- (7) 森下純昭『狭衣物語』冒頭部「花こそ春の」引歌考(『岐阜大学国語国文学』第二十六号、一九九九年三月)。

- (8) 入江相政『岩波講座日本文学 狭衣物語』(岩波書店、一九三一年)は、「花こそ春の」の本歌として『堀川百首』所収の源師時の歌「玉の井に咲けるを見れば山吹の花こそ春のさかりなりけり」(引用同書)を挙げるが、同集の成立時点は、『狭衣物語』より五十年程下るために従いがたい。

- (9) 『狭衣物語』における引用表現が、祿子内親王を中心とするサロン内の知識共有に立脚していることは、冒頭表現の詞章に『六条斎院歌合(天喜四年閏三月)』中の歌句との照応をみる三谷栄一「狭衣物語の文学の方法——物語の享受から「心深し」の美意識まで——」(『国文学 言語と文芸』第五二号、一九六七年五月)や、『枕草子』『伊勢集』のサロン内での受容をそれぞれ解く三谷「枕草子の影響——狭衣物語その他」(『枕草子講座4 言語・源泉・影響・研究』有精堂出版、一九七六年)、倉田実「頼通の時代と狭衣物語」(『王朝撰関期の養女たち』翰林書房、二〇〇四年。礎稿の初出は同年)等によって明らかにされている。また、引用の中にサロン内で創出された文芸も含まれることを示す例として、『六条斎院歌合(天喜三年)』(『祿子内親王物語歌合』)に名が見える『石垣沼の中將』『霞隔つる中務の宮』の要素が『狭衣物語』において「換骨奪胎」されていることを指摘する論に、久下晴康「狭衣物語」の創作意識——六条斎院物語歌合に関連して——(『平安後期物語の研究 狭衣・浜松』新典社、一九八四年)があり、「花こそ春の」の引歌を認定する上での傍証となる。

- (10) 『源氏物語』の引用は阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男校注・訳『新編日本古典文学全集 源氏物語 ①～⑥』

(小学館、一九九四～一九九八年)による。

- (11) 『狭衣物語全註釈』は、狭衣詠の第四句「折らで過ぎゆく」が第二系統(九条家旧蔵本(大島本))では「折らで過ぎ憂き」とあることを指摘するが、この異文は上句の「野辺の霞もひまなくて」との整合性が取れないため、「このあたりに立ちこめる『源氏物語』の余臭を鋭敏に嗅ぎ取り、歌句を変更していったものと思われる」と述べるように夕顔巻を参照した改変本文と考えられる。

- (12) 三谷栄一・関根慶子校注『日本古典文学大系 狭衣物語』(岩波書店、一九六五年)。

- (13) 『本朝麗藻』の引用は『群書類従 第八輯 装束部 文筆部』(続群書類従完成会、一九三二年)による。

- (14) 大谷雅夫「道をうづむ花」(『歌と詩のあいだ 和漢比較文学論攷』岩波書店、二〇〇八年。礎稿の初出は二〇〇一年)。

- (15) 新全集本は致仕大納言女への訪問を別日(同月十余日)の出来事とするが、その場合も展開の連続性は変わらない。

- (16) 鈴木泰恵「恋の物語の終焉——式部卿宮の姫君をめぐって——」(『狭衣物語／批評』翰林書房、二〇〇七年。礎稿の初出は一九八七年)。